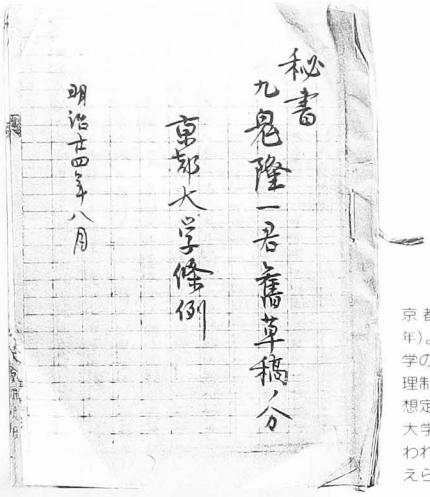
京大創立への動き



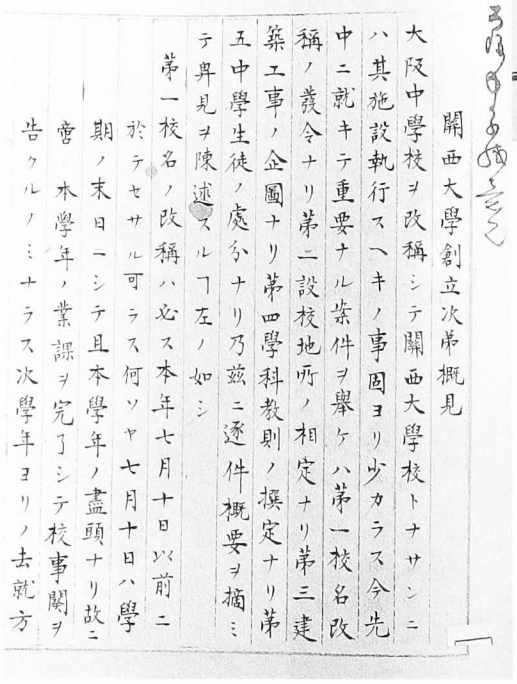
京都大学条例(1891年)。全42条で、京都大学の組織、会計制度、管理制度などが具体的に想定されている。「京都大学」という言葉が使われた最も早い例と考えられている。(2-1)

関西に大学を設置しようとする動きは、京大が創立される十数年前から始まっていた。1885(明治18)年には大阪中学校が大学分校と改称された。すぐ翌年に出された一連の学校令によって、大学分校は第三高等中学校に改編されたが、大学分校という名称からもわかるように、もし数年存続していれば、このまま大学に昇格したかもしれない。

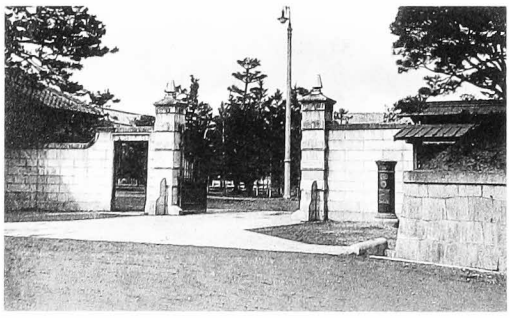
学校令制定以後の設置運動は、専ら文部省の外から起こってくる。帝国博物館総長九鬼隆一、自由党、地元の京都府会の案などである。これらの案に共通して見られるのは、東大との比較の視点である。創立後の京大が常に東大と比べられ、また京大内部の人間も東大を意識せざるをえないという構造は、創立に至る動きのなかですでに生まれていたといえる。

文部省内でも、高等教育の制度については様々な構想があったが、帝国大学を京都に設置する動きが急速に具体化するのは日清戦争後であった。西園寺公望(さいおんじきんもち)文部大臣のもと4人の創立委員(牧野伸顕(のぶあき)文部次官、木下広次(ひろじ)専門学務局長、永井久一郎会計課長、折田彦市第三高等学校長)が任命され、創設計画案の作成にあたったのである。

日清戦争終結後わずか2年で京大創立に至った背景には、それまでの設置運動の積み重ねがあったことは間違いないだろう。

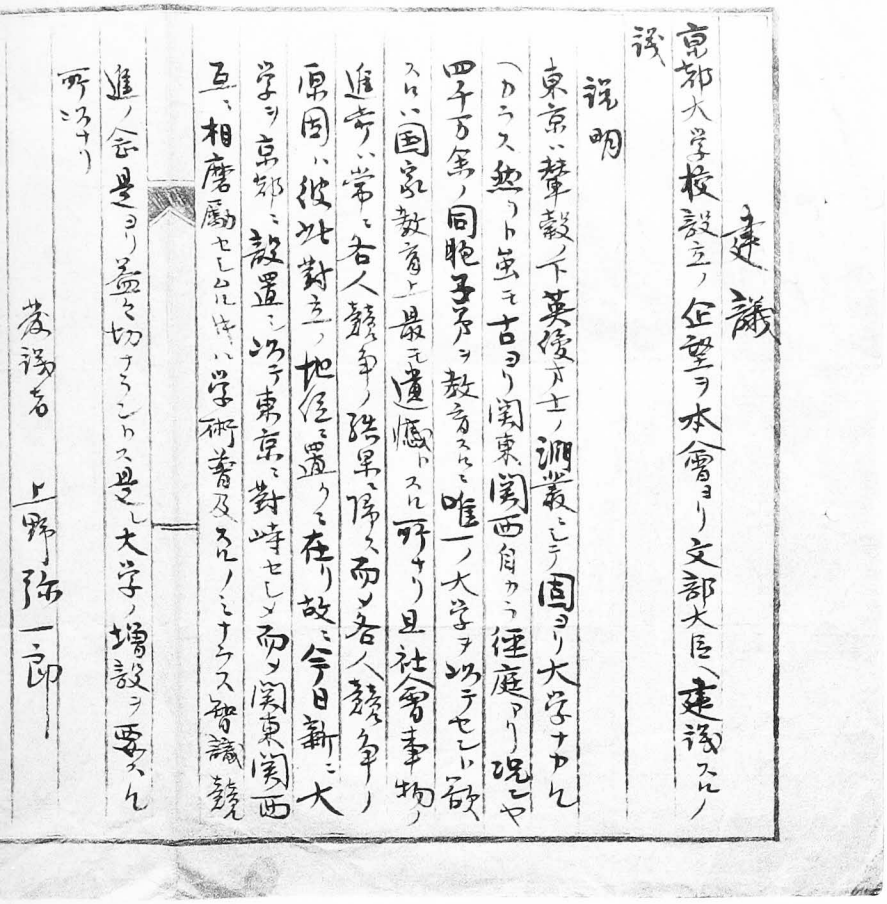

關西大學創立次第概見
大阪中學校ヲ改稱シテ關西大學校トナサンニハ其施設執行スヘキノ事固ヨリ少カラス今先中ニ就キテ重要ナル案件ヲ擧ケハ第一校名改稱ノ義今ナリ第二設校地所ノ相定ナリ第三建築工事ノ企圖ナリ第四學科教則ノ撰定ナリ第五中學生徒ノ處分ナリ乃茲ニ逐件概要ヲ摘ミテ卑見ヲ陳述スルヿ左ノ如シ
第一校名ノ改稱ハ必ス本年七月十日以前ニ於テセサル可ラス何ソヤ七月十日ハ學期ノ末日ニシテ且本學年ノ盡頭ナリ故ニ當本學年ノ業課ヲ完了シテ校事關ヲ告クルノミナラス次學年ヨリノ去就方

関西大学創立次第概見(1885年)。大阪中学校から文部省に対して、「関西大学校」への改称を上申した文書。これを下地にして大阪中学校は大学分校と改称することになる。(2-2)



京都帝国大学正門。「学都」としての京都の中心的存在となった。(2-3)

東京帝国大学赤門。京大創立時には法・医・工・文・理・農の6分科大学に2,000人近い学生が在学していた。(2-4)



建議

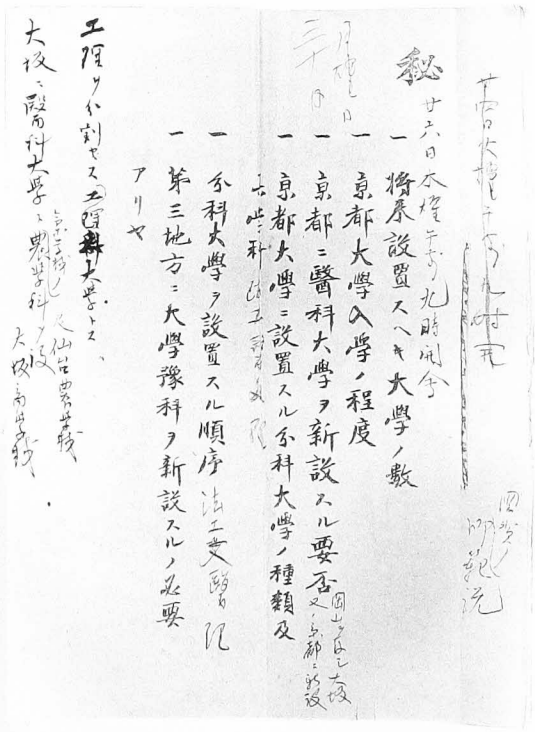
京都大学校設立ノ企望ヲ本會ヨリ文部大臣ヘ建議スルノ議

説明

東京ハ輦轂ノ下英傑方士ノ淵叢ニテ国ヨリ大学ナカレ（カニス）熱ト雖モ古ヨリ関東関西自カラ徑庭アリ況ヤ四千方余ノ同胞子弟ヲ教育スルニ唯一ノ大学ヲ以テセハ敬スルハ国家教育ト最モ遺憾トスル所ナリ且社會事物ノ進歩ハ常ニ各人競争ノ結果ニ俟ツ而シテ各人競争ノ原因ハ彼此對立ノ地位ニ置クニ在リ故ニ今日新ニ大学ヲ京都ニ設置シ以テ東京ニ對峙セシメ而シテ関東関西互ニ相磨勵セシムレハ学術著及ヘルノミナラス智識競進ノ余是ヨリ益々切ナラントス是レ大学ノ增設ヲ要スル所以ナリ

發議者　上野弥一郎

京都大学設立に関する建議（1894年）。当時京都府会議員だった上野弥一郎から府会に提出されたもの。東大との競争の視点が明確に表れている。（2-5）



秘

一 将来設置スヘキ大學ノ數

一 京都大學ハ學ノ程度

一 京都ニ醫科大學ヲ新設スル要否

一 京都大學ニ設置スル分科大學ノ種類及

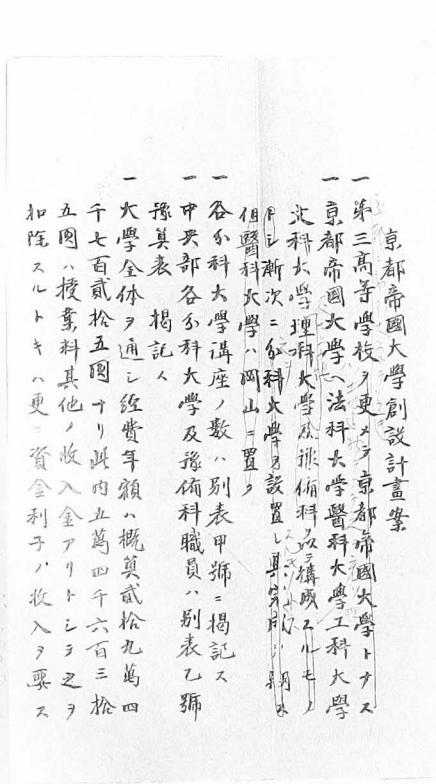
一 分科大學ヲ設置スル順序

一 第三地方ニ大學豫科ヲ新設スルノ必要

アリヤ

工科大學ヲ分割セス工學科大學トス

大阪ニ醫科大學ヲ別ニ設ク



京都帝國大學創設計畫案

一 第三高等學校ヲ更メテ京都帝國大學トナス

一 京都帝國大學ハ法科大學醫科大學工科大學

文科大學理科大學農科大學ニ構成スルモノ

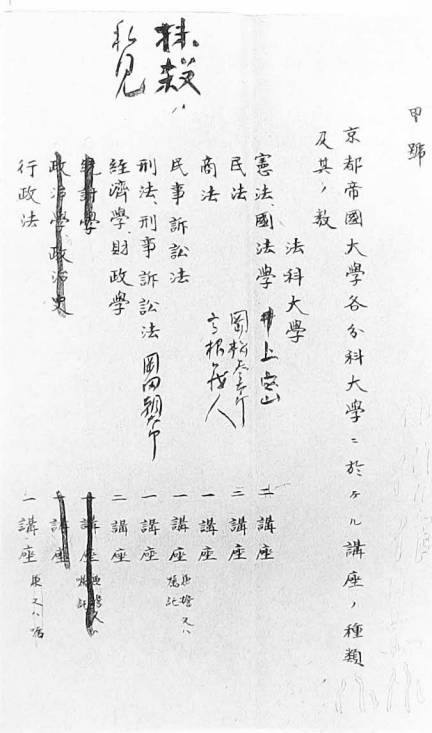
但シ漸次ニ分科大學ヲ設置シ其完成ハ別ニ期ス

但醫科大學ハ岡山ニ置ク

一 各分科大學講座ノ數ハ別表甲號ニ掲記ス

一 甲号部各分科大學及豫備科職員ハ別表乙號豫算表　掲記ス

一 大學全体ヲ通シ經費年額ハ概算貳拾九萬四千七百貳拾五圓ナリ此内五萬四千六百三拾五圓ハ授業料其他ノ收入金アリトシテ之ヲ扣除スルトキハ更ニ資金利子ハ收入ヲ要ス



甲號

京都帝國大學各分科大學ニ於ケル講座ノ種類及其ノ數

法科大學

憲法　國法學　井上密　二講座

民法　商法　岡松参太郎　二講座

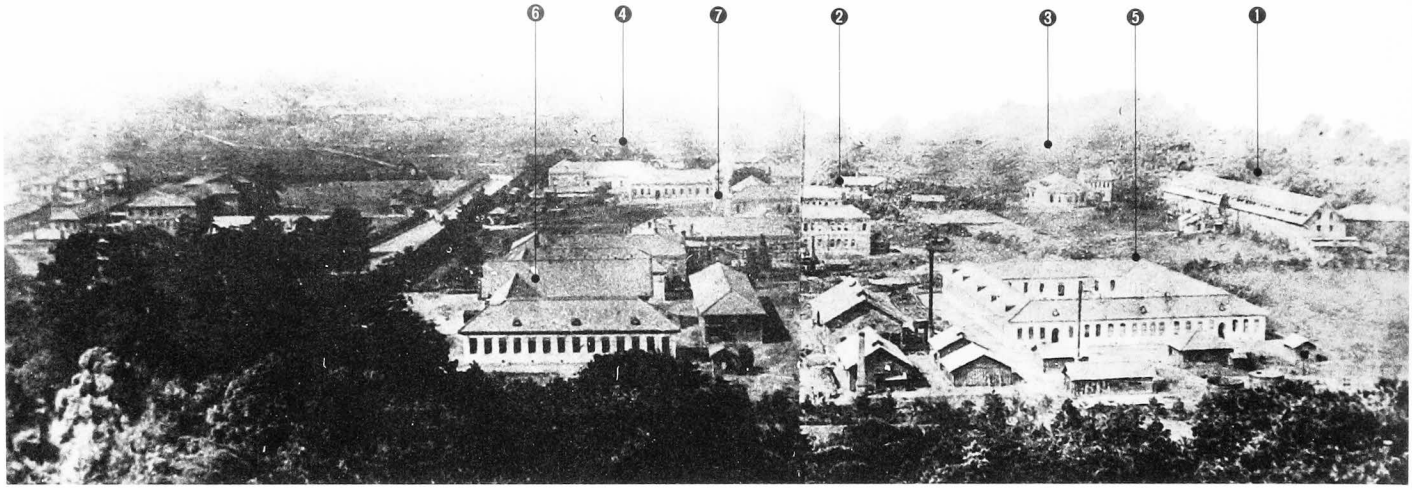
民事訴訟法　刑法　刑事訴訟法　岡田朝太郎　一講座

經濟學　財政學　一講座

~~事務學~~　~~政治學　政治史~~　~~二講座~~

~~行政法~~　~~一講座~~

京都帝国大学創設計画案。日清戦争後に文部省内で検討された案のなかでは、初期のものと推定される。手書きによる修正の跡が残っており、計画案の変遷がわかる。（2-6）



吉田山からの京大の全景写真。建物の配置から、1898年撮影と考えられる。(2-7)

京都帝国大学の創立

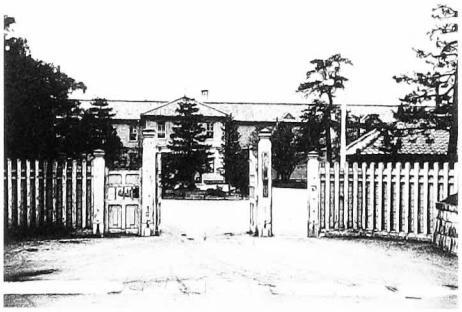
1897(明治30)年6月18日、勅令第209号により、日本で2番目の帝国大学が京都に創立された。その第1条には「京都ニ帝国大学ヲ置キ京都帝国大学ト称ス」と簡潔に記されている。

京都帝国大学が設置された場所は、京都市上京区吉田町(現:左京区吉田本町)、それまで第三高等学校が使用していた敷地・建物を引き継いでの出発であった。一方、第三高等学校は東一条通を隔てた南側に新たな敷地を得て移ることになった。

京都帝国大学には、法・医・文・理工の四つの分科大学(現在の学部に相当)が置かれることが決まっていたが、創立当初は理工科大学のみがまず設置された。初年度の人員は、総長1人、教授4人(うち外国人1人)、助教授5人など教官13人、学生47人という小規模なものであり、予算、設備でも不十分な点が多く存在した。しかし、初代総長となった木下広次は、第1回入学宣誓式において「書籍器械標本は学校教育に必要の設備なるに相違なきも尚此外に一大要素の存在を忘るべからず」と述べ、学生に「好学の志操」を持つことを求めた。また、木下は「当大学は東京帝国大学の支校にあらず」と宣言し、通則にはより自由な科目選択の制度を定めるなど、学生の自発性を重視する方針をとった。

高い理想を抱いての新大学の発足であった。

創立時の教職員と学生。円内が木下広次総長。(2-8)

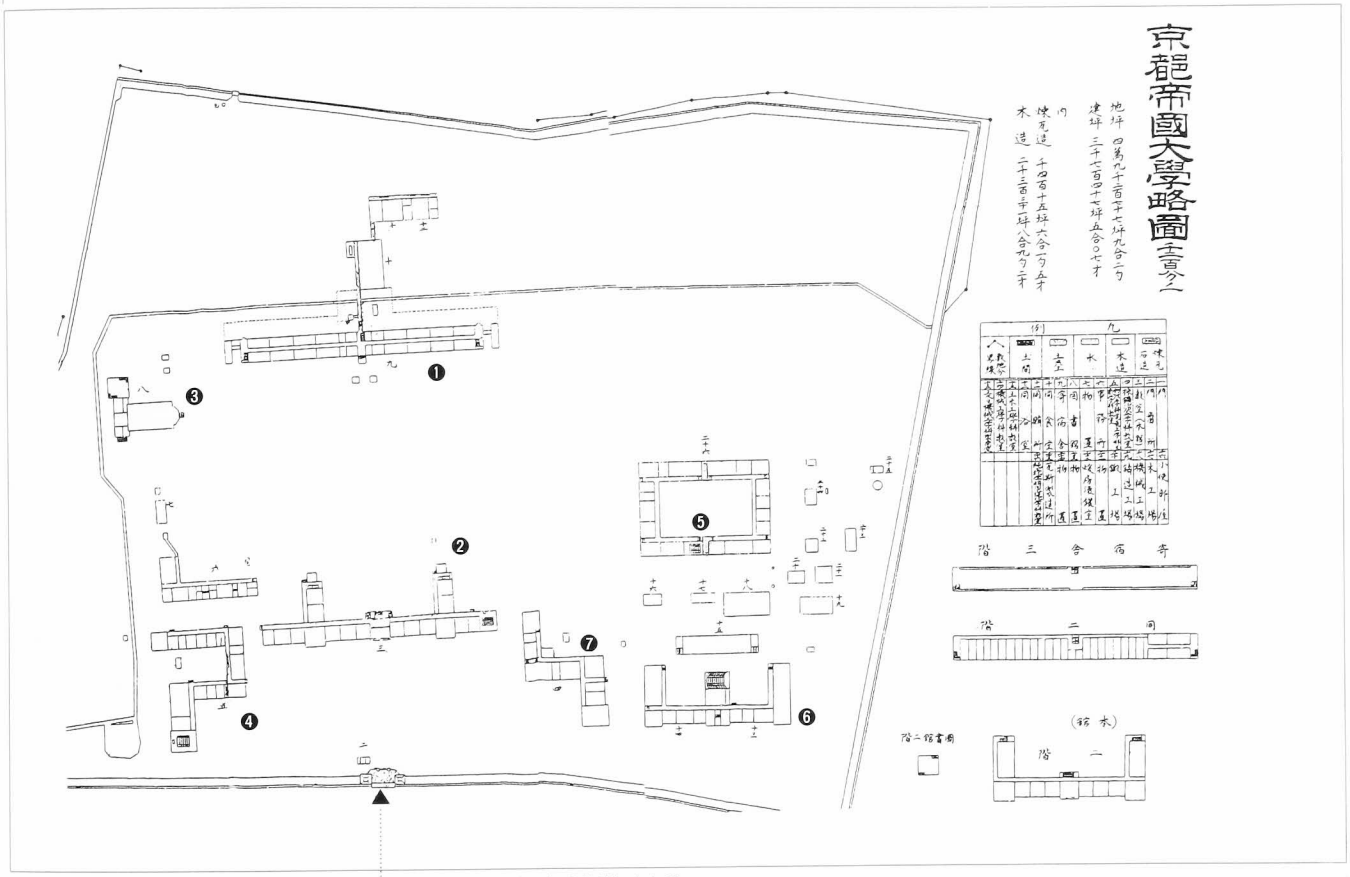


第三高等学校正門と本館。第三高等学校は現在の総合人間学部構内に移転したが、その後も京大とは密接な関係を持ちつづけた。なお、正門と門衛所(正門右側)は現存。(2-9)

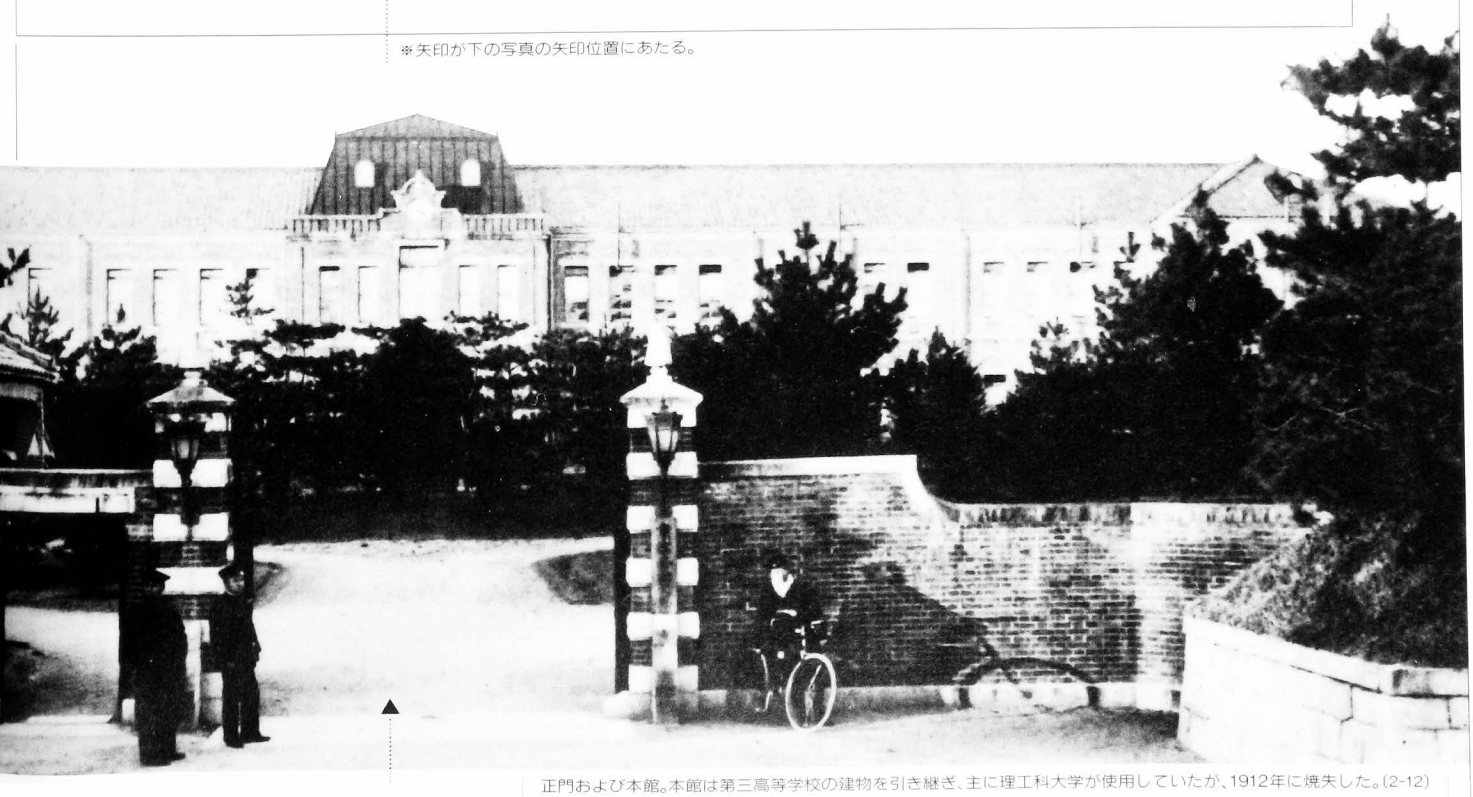
現在、学生部・体育指導センター等に使われている建物（地図上の④）。三高時代の建物として現存する唯一のもの。(2-11)

初期の本部構内の建物配置図。
1年間の建物の増加ぶりがわかる。(2-10)

創立当時の主な建物
❶寄宿舎（1898年に三高より京大に移管）
❷本館
❸図書館
❹物理学科、電気工学科、数学科教室
❺純正化学科、製造化学科教室
❻土木工学科、機械工学科教室
❼採鉱冶金学科教室
□ 部分は1898年に建てられた部分、
それ以外の部分は1897年以前に建てられ、三高より引き継いだものである。



※矢印が下の写真の矢印位置にあたる。



正門および本館。本館は第三高等学校の建物を引き継ぎ、主に理工科大学が使用していたが、1912年に焼失した。(2-12)

創立時の群像

文相当時（1896年ごろ）の西園寺公望（1849〜1940）。のち2度内閣を組織し、その後も元老として政界で重要な役割を果たした。(2-13)

「静脩館」の書。西園寺は京大の図書館を静脩館と命名し、自ら揮毫した。この書は、現在も附属図書館2階閲覧室に掲げられている。(2-14)

京都帝国大学の創立に関わった代表的な人物として、西園寺公望と木下広次の2人があげられる。日清戦争後、京大創立の動きが本格化したときに文部大臣だったのが西園寺であり、文部省専門学務局長として実務の中心にいたのが木下だった。

西園寺は、「東洋の陋習」を打破して教育界の文明化を求め、具体的には外国語の重視を主張するなど、開明的な教育観を持っており、世間から「世界主義」と評された。西園寺は、京大の創立には強い思い入れを持っていたようで、留学の決まっていた法科大学の教官候補者たちを、わざわざ自邸に招いて激励したと伝えられている。

木下は、第一高等中学校（のち第一高等学校）の教頭および校長として、当時としては画期的な、寄宿舎における学生の自治を説いたことで教育者としてすでに著名であった。やがて文部省に転じた木下は、京大創立にあたっては文部省側の中心人物となり、自ら初代総長に就任した。以後、約10年にわたって木下は総長に在任して、創立期京大の制度・施設の整備に尽力した。

西園寺と木下は、ともに明治初期にフランスに留学して法学を勉強しており、その頃から親交が深かった。この2人の教育観が創立期の京大に与えた影響は無視できないだろう。

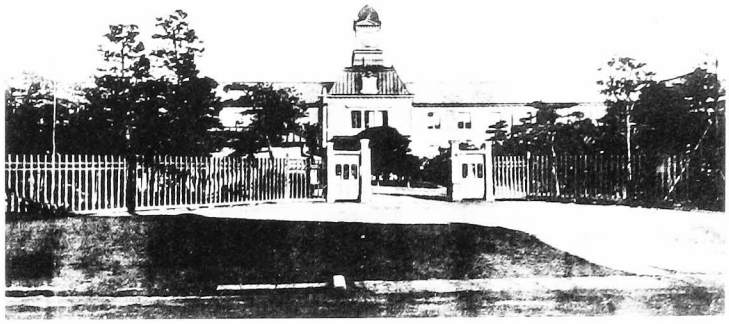
清風荘。百万遍北西に現存する清風荘は、西園寺が京都別邸として使用していた。政界の要人との会談に使われる一方で、西園寺は懇意の京大教授との文雅の集いの場としても愛用していた。西園寺の死後、保管していた住友家より京大に寄贈された。(2-15)

創立準備のために留学中の教官予定者。前列中央難波正（電気工学）、その左小川梅三郎（土木工学）、後列左から3人目朝永正三（機械工学）。創立時の京大の教官に予定された人々は、多くが就任前に欧米に留学して研鑽を積むことを命じられた。(2-16)

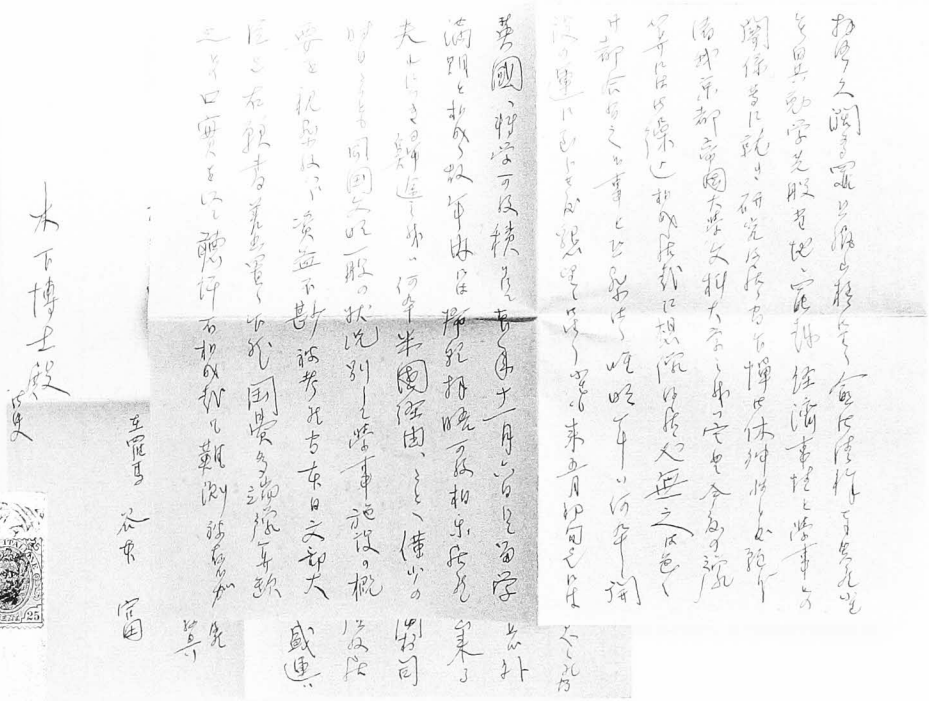
初代の書記官（現在の事務局長に相当）であった中川小十郎（左から2人目、写真は就任以前のもの）。中川の右は予備門時代の同級生の夏目漱石。のちに中川は京都法政学校（現：立命館大学）を創立した。(2-17)

木下広次(1851~1910)。木下は熊本出身。父犀潭(さいたん)は著名な朱子学者だった。(2-18)

「自重自敬」の書。木下は、「自重自敬」「自発自得」といった精神を学生に説いた。(2-19)



第一高等中学校正面。木下は1888年に教頭、1891年に校長に就任した(1893年まで)。(2-20)



留学中の谷本富(のち文科大学教授)より木下宛の手紙。(2-21)

留学中の岡村司(のち法科大学教授)より木下宛の絵葉書。(2-22)

分科大学の設立　理工科大学

初代の理工科大学長中沢岩太(1858〜1943)。木下総長を助け、京都帝国大学通則制定に大きな役割を果たした。のち京都高等工芸学校(現在の京都工芸繊維大学の前身)の校長に就任した。(2-23)

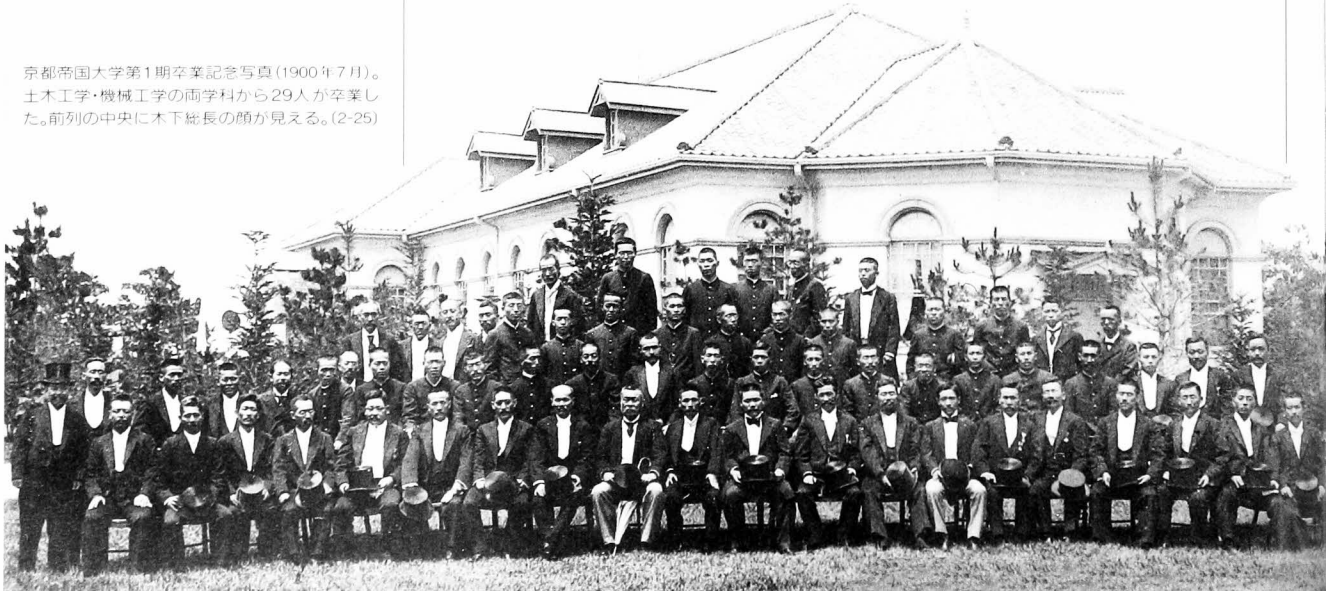
創立当時の土木工学科の受教簿。学生は入学時に受教簿を受け取り、選択した科目の受持教官から、その課程の開始時、終了時、さらに試問の合格時に印をもらうことになっていた。(2-24)

日清戦争終結後、工業の振興を求める声が強まり、そのための人材養成の手段として、高等教育機関の拡充が唱えられるようになった。京都帝国大学において理工科大学が最初に設立されたのは、第三高等学校工学部の設備をそのまま利用できたことが大きな理由ではあったが、それ以外に、上記のような国家的、社会的要請が背景にあっただろう。

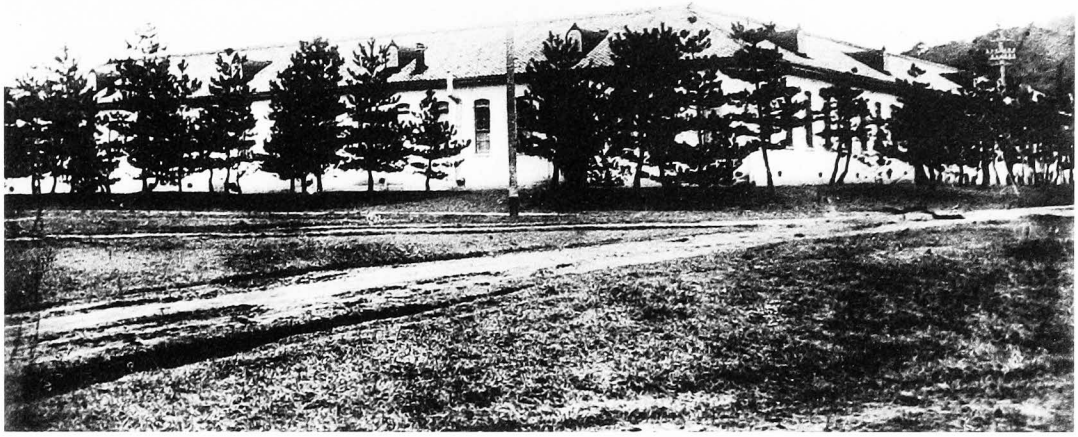
また、東大と異なり、理科と工科を同一の分科大学としたのは、当時の史料によれば最も設置を求められている学科を最優先にしたため学科数が少なかったこと、数学・物理学・化学などは理工科共通にしても教育上差支えなく経済上も有利であること、があげられている。

創立時には、土木工学・機械工学の2学科のみが設置されたが、翌1898(明治31)年には、数学・物理学・純正化学・製造化学・電気工学・採鉱冶金学の各学科が増設され、その規模は一気に拡充し、設備も次第に整備されていった。教育システムとしては、学年制ではなく科目制が採用された。学年ごとに受講科目を定めるのではなく、受講の順序は問われずに修学年限内(3年〜6年)にそれぞれの科目試問に合格すれば卒業試問を受けられるという、より学生の科目選択の自由を認めた制度であった。

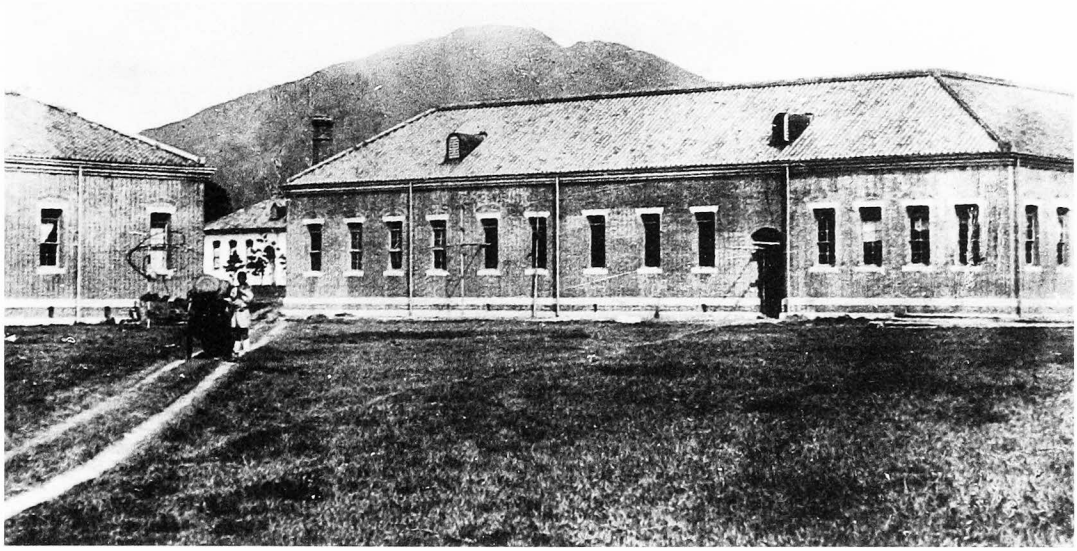
京都帝国大学第1期卒業記念写真(1900年7月)。土木工学・機械工学の両学科から29人が卒業した。前列の中央に木下総長の顔が見える。(2-25)



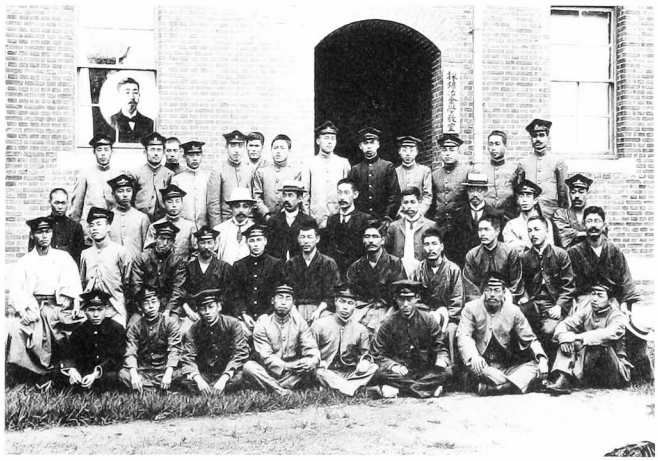
土木工学科および機械工学科教室（1898年竣工、真水英夫設計）。（2-26）



純正化学科および製造化学科教室（1898年竣工、真水英夫設計（推定））。（2-27）



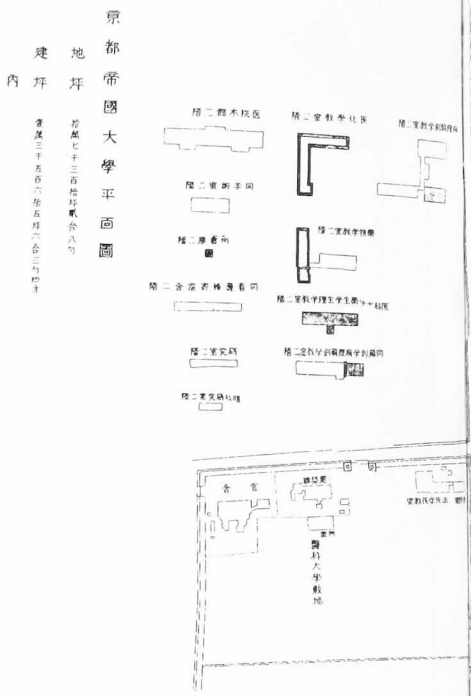
採鉱冶金学科教室。（2-28）



1906年の採鉱冶金学科の学生たちと教官。（2-29）

分科大学の設立　医科大学

初代の医科大学長坪井次郎(1862〜1903)。設備の充実につとめたが在職中に死去した。(2-30)

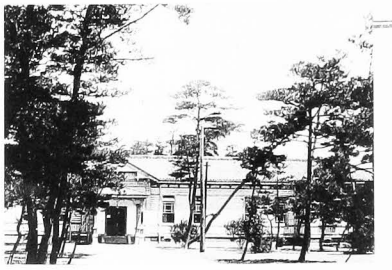


医科大学平面図(1905年、北が下になっている)。(2-31)

第二の帝国大学が創立されることが決まってからも、医科大学の敷地はなかなか決定しなかった。当初文部省は、医科のみを交通の便もよく人口も多い大阪に置くことを考えていたが、京都では府会の有力者らが奔走して誘致運動を繰り広げ、京都設置を実現させた。ところが京都設置の決定後文部省は、医科大学は鴨川の西側にあった京都府医学校(現：京都府立医科大学)の校舎を譲り受けて増改築を行えばよいと考えていたため、創立委員の1人猪子止戈之助(いのこしかのすけ)は消極的であるとして反対し、その意見が容れられて、すべての設備を新築することにようやく決定した。その結果買収されたのが現在の医学部および病院構内である。

医科大学は、このように設立にあたっては設備の充実に意を注いでおり、その後も他の分科大学に比べいちはやく拡充への道を進んだ。医科大学は1899(明治32)年の設立時は8講座であったが、3年後には18講座に増加した。施設も構内を南北に貫く道路をはさんで東側に解剖学教室、病理学教室、西側に生理学・衛生学教室、薬物学・医化学教室が次々と完成した。一方、附属医院も本館が1899年に完成し、その北側に平屋建ての病舎が東西対称の形で建てられていった。設立当初は病床数わずか30だったが、1906年には入院患者が300人前後、外来患者も1日500人を数えるまで拡充した。

ところで、この時期京大にはもう一つ医科大学が存在した。1903年に設立された福岡医科大学がそれである。これは、すでに計画されていた九州帝国大学のうち要望の強かった医科大学のみ先に設置されたもので、当時の法令では単科大学が認められていなかったため、京大の一分科大学としたのであった。福岡医科大学は設立後9年間で合計330人の卒業生を送り、1911年九州帝国大学医科大学となった。



福岡医科大学事務所。京都から離れていたこともあり、他の分科大学より独立性が強かった。(2-32)

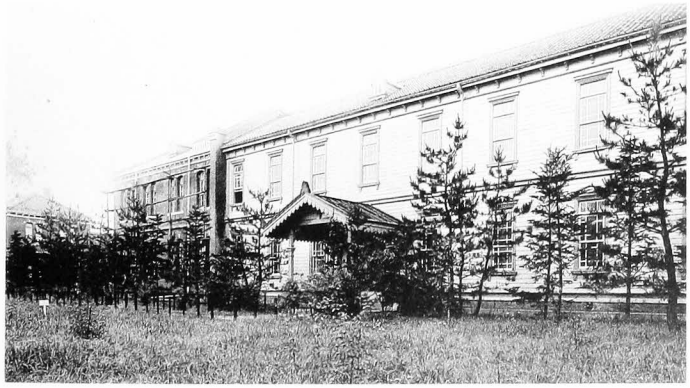
医科大学正門より北をのぞむ(1910年ごろ)。この南北に貫く道路は現存しており、今でも当時の様子をしのばせている(平面図上の▼部分にあたる)。(2-33)

初代の附属医院長猪子止戈之助(1860〜1944)。猪子は京都府医学校長から京大に転じた。(2-34)

附属医院本館(1899年竣工、真木英夫・山本治兵衛設計)。(2-35)

薬物学教室、医化学教室(1902・03年竣工、山本治兵衛設計(推定))。(2-36)

生理学教室(1902年竣工、山本治兵衛設計)。(2-37)



解剖学教室(1901年竣工、山本治兵衛設計)。(2-38)

病理学教室(1903年竣工、山本治兵衛設計(推定))。(2-39)

分科大学の設立　法科大学

初代の法科大学長織田萬（よろず）（1868〜1945）。のち、教授在職のままオランダの国際司法裁判所判事もつとめた。（2-40）

法科大学の開設は1899（明治32）年、10講座、学生数46人であった。

法科大学は、東京帝国大学法科大学とは異なった教育システムを採用した。当時、詰め込み式、暗記重視との批判のあった東大と比べ、学生と教員の間の相互啓発を重視したゼミナール制の導入や、卒業論文などを実施し学生の自発性を喚起するよう工夫を凝らした。また、コース制をとり、科目の選択をより自由にして、修学年数も東大の４年ではなく３年とした。

これらのシステムは、設立当初の教授陣が就任前のドイツ留学で自らが体験した大学教育のあり方に基づいていた。ドイツの大学においては研究と教育の結合が説かれており、19世紀後半には世界の学問をリードする存在になっていた。彼らの大半はまだ30歳代であり、時に「天狗」と称されながら、意気軒昂として、新しい大学を作り上げようとしたに違いない。

しかし、早くも1907年にはこのシステムは終焉を迎える。法科大学規程は東大にならったものに改定され、ドイツ型システム導入の中心人物であった高根義人は40歳で辞職する。当時官吏への登竜門であった文官高等試験において、京大の卒業生の合格率が低かったことが、その理由であった。（註１）

官吏養成という当時の帝大法科に対する社会からの要求に結局抗しきれなかった形だが、初期の京大法科の試みは今なお私たちに大学のあり方を問いかけ続けている。

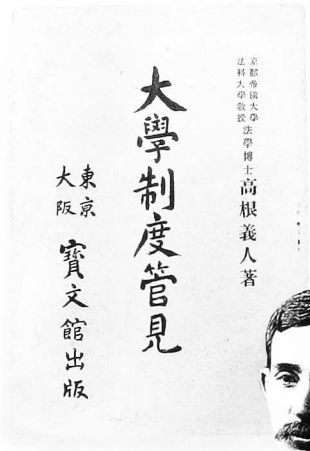
分科若クハ二分科ヲ設ケ其他ハ順次之ヲ完備スルモ固ヨリ不可ナシ近ク設ケラレントスル福岡醫科大學ハ九州大學ノ醫科大學ナル哉若クハ獨立セル福岡醫科大學ナル乎現行ノ大學令ニ依レハ必ラス前者ナラサル可ラス余輩ハ固ヨリ其然ルヲ信セント欲スル者ナリ

第二　大學ノ自治機關

甲　大學ノ自治

大學ハ眞理ノ發見所學問ノ研究所ナリ政治的變遷若クハ社會的感情ニ依リテ影響セラルヽトキハ生氣アル獨立ノ研究ヲ爲ス能ハサルナリ故ニ大學ハ之ヲ獨立ノ團體ト爲シ充分ナル自治ヲ與フ可シ普魯西ニテハ明ニ之ヲ法人ト認メサルモ幾分ノ自治ヲ許セリ（普國普通國法第二編第二章第六十七條及第六十八條佛國ニテモ一千八百八十五年以來大學ハ法人ト見做サレ財産ヲ所有シ贈與ヲ受クルノ權ヲ附與セラレタリ）一千八百八十五年十二月二十八日同年七月二十五日法律人或ハ財産ノ獨立ナクハ大學ノ獨立ナキカ如ク論スルモノアリ是レ英米多數ノ私立大學ノ狀態ノミヲ知リテ其他ヲ知ラサル者ノ言ナリ歐洲大陸ノ諸大學ハ多ク官立ニシテ其費用ハ殆ント全部毎年國庫ノ支出スル所ナリト雖モ法律ヲ以テ

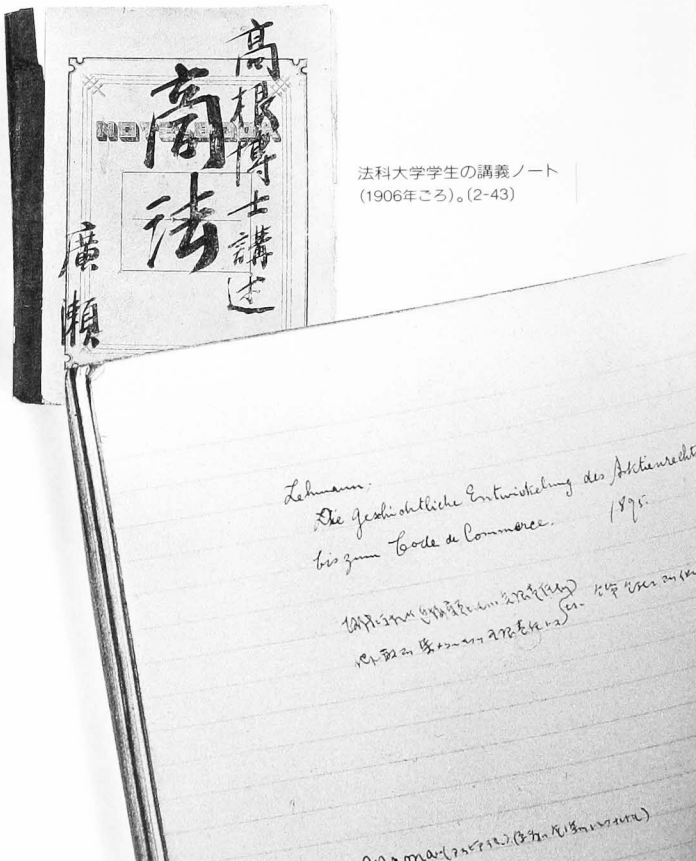
七



京都帝國大學法科大學教授法學博士高根義人著
大學制度管見
東京　大阪　寶文館出版

高根義人著『大学制度管見』（1902年刊）。高根はこの中で、総長・分科大学長の互選制の導入、教官側の講義の自由、学生側の学修・転学の自由などを主張した。体系的な大学自治論としては日本で最も早いものといえる。（2-41）

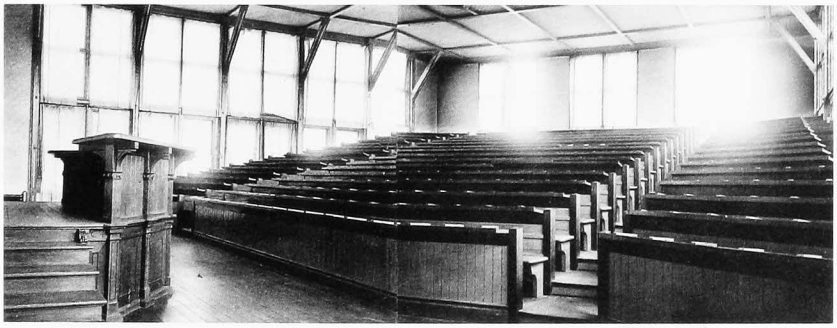
高根義人（1867〜1930）。『大学制度管見』を著し、ドイツ型教育システムの導入を唱えた。（2-42）



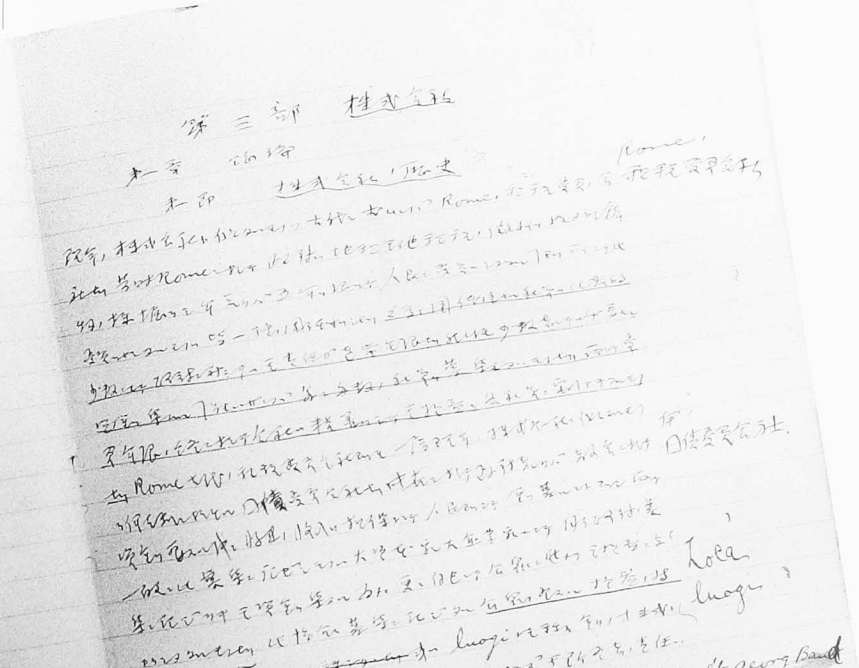
法科大学学生の講義ノート（1906年ころ）。（2-43）

法科大学東（ひがし）大講堂。大学の儀式場としても使用された。照明の凝った造りがそのことを物語っている。(2-44)

法科大学第1教室。(2-45)



法科大学全景。現在の時計台の北側に位置する。左の建物は文科大学と共用していた。(2-46)



（註1）京大法科が最初の卒業生を出した1903年から1906年までの4年間では、卒業生総数299人のうち合格者は9人であるのに対し、同期間の東大法科では702人中163人が合格していた。

分科大学の設立　文科大学

文科大学は、当初より計画のあった4分科大学のなかでは最も遅く、1906（明治39）年に設立された。同年にまず哲学科が置かれ、以後順次史学科、文学科と設置されていった。

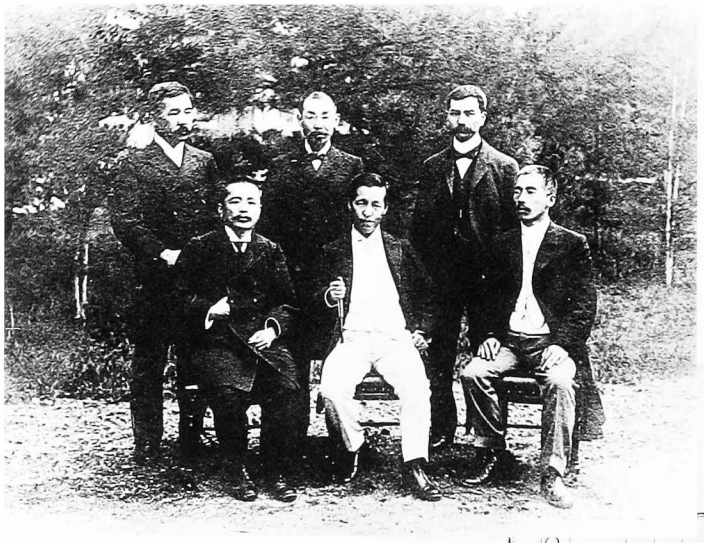
創立期の文科大学のいちばんの特色は、人材登用のユニークさにあった。新聞界より内藤虎次郎（湖南）を東洋史に、文壇より幸田成行（露伴）を国文学に迎えるなど、経歴にこだわらず広く人材を求めた。夏目金之助（漱石）を英文学の教授として採用することも一旦は決定していたが、本人の都合で実現せず、代わりに上田敏が招かれた。一方、学生も人数は30人余りと少ないが、高等学校を卒業したばかりの若者から、教授よりも年長の者まで多様であった。彼らは夕方まで出入自由とされた研究室で語り合い、月1回全教授学生の参加する談話会で自由討議を行い教官相互の激しい論争を目のあたりにするなど、「厳めしい帝大で学んでゐるといふよりも、寧ろ近代的寺小屋へ通うてゐるという感じ」（最初の学生でのち教授となった羽溪了諦の回想）という印象を当時の学生に与えたのであった。

京都という古典文化の地を背景として、活力ある自由な雰囲気のなかで新しいものを作り上げていく—文科大学は学問研究の場として理想的な姿で始まった。

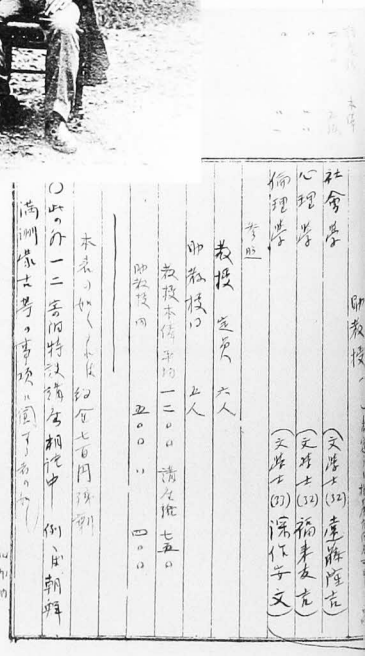
初代の文科大学長となった狩野亨吉（1865〜1942）。制度の整備、教授の人選などに尽力した。（2-47）

内藤虎次郎（湖南、1866〜1934）。その博識を基礎に独自の史学を作り上げた。内藤は、授業においては準備ノートは作成せず、何冊もの本を教壇に広げ、学生の面前で講義を作っていったという。（2-48）

大西祝（1864〜1900）。東京専門学校で哲学などを講じた。文科大学の初代学長に内定し、計画案も作成していたが、夭逝。（2-49）



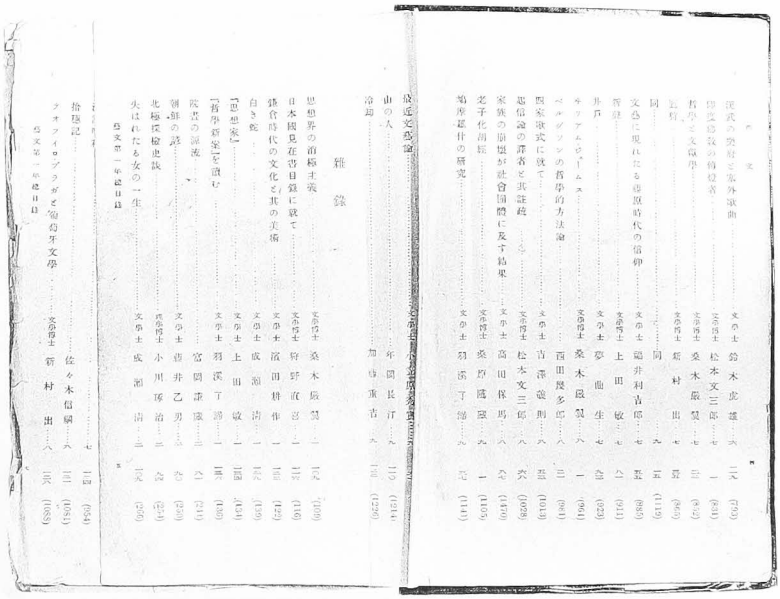
文科大学創立時の教授たち。前列左から狩野直喜、谷本富、松本文三郎。後列左から桑木厳翼、狩野亨吉、松本亦太郎。（2-50）



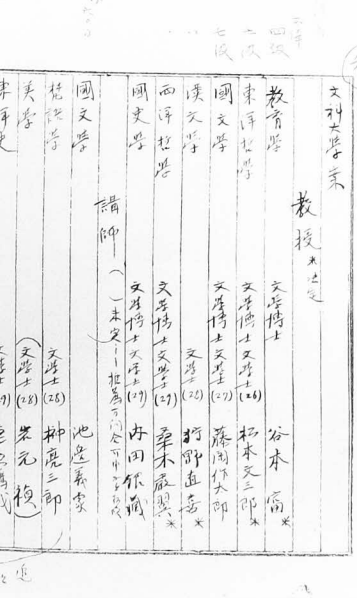
谷本富作成の文科大学案。1907、8年頃と推定されるが、このときにはまだ内藤らの名は見えない。（2-51）

1909年竣工の文科大学研究室。文科大学独自の建物としては最初である。(2-52)

1909年の最初の卒業生。(2-53)



「芸文」(げいもん)目次(第1巻)と表紙。「芸文」は学科にとらわれない文科大学全体の学術誌。執筆者を見ても、文科大学の人材の豊富さがわかる。(2-54)



図書館と尊攘堂

初代館長の島文次郎(1871〜1945)。島は1910年まで館長をつとめた。(2-55)

図書館の閲覧業務が正式に始まったのは、1899(明治32)年のことだった。初代の図書館長には、帝国大学文科大学を卒業して間もない弱冠28歳の島文次郎が任命された。

木下総長は、積極的に書籍の寄贈を諸方面に呼びかけ、自らも多数寄贈するなど図書館の充実に努めた。また、学生にも指導教官の保認証さえあれば書庫内の検索や書籍の貸出も許可するなど、東大とは違った開かれた制度を導入した。そのおかげか、創立直後の学生の卒業論文には原書を駆使して書かれた優秀なものが多かったという。さらに木下は、京大の図書館を学外者にも公開して、単なる大学図書館にとどまらない第二の帝国図書館としての役割も持たせることを意図していたといわれる。このことは結局実現しなかったが、創立期の京大が学外への開放を目指していた例として興味深い。

尊攘堂は、もともと萩藩出身の政治家品川弥二郎が、1887年市内の高倉通錦小路上ルに建てた、維新の志士の霊を祭り、遺品を展示する施設だった。品川の死後、京大に寄贈され、1903年本部構内の附属図書館南側に新設された。その後は、敗戦まで年1回例祭が執り行われ、その際には所蔵品が展示された。

附属図書館、尊攘堂、そして1914(大正3)年竣工の文学部陳列館の建ち並ぶこの一角は、構内でもっとも静寂な、学問研究にふさわしい空間を形作っていたように思われる。

今般本學創立ニ付紀念トシテ書籍文書標本等御寄贈下サレ候ハバ永ク之ヲ本學ニ藏シ學術研究ノ用ニ供スベク候間成ルベク御寄贈ニ預リ度懇請ノ至リニ堪ヘズ候別記寄贈手續相添ヘ此段貴意ヲ得候敬具

明治三十年　月　日

京都帝國大學總長法學博士木下廣次

殿

追テ本學圖書館ハ其設備ノ完成ヲ須チテ本學々生ノ外一般公衆ノ閲覧ヲモ許シ候樣致度希望　コレアリ候

京都帝國大學圖書標本等寄贈手續

図書館創立時に各方面に送られた寄贈依頼文書。左側に「一般公衆ノ閲覧」を許可したい、と述べられている。(2-56)

書庫内部。大学創立時の蔵書数はわずか4万冊あまりだったが、1906年には16万冊以上に増加した。(2-57)

図書館(中央)と尊攘堂(左)。図書館は、現在の附属図書館よりも北側、ちょうど教育学部のあたりに位置していた。図書館の右後方に見える建物は書庫。(2-58)

閲覧室内部。文部技師真水英夫の設計とされ、窓枠のアーチが特徴的である。閲覧室は、学生数がまだ少ない頃は式典や講演会などにも使用された。(2-59)

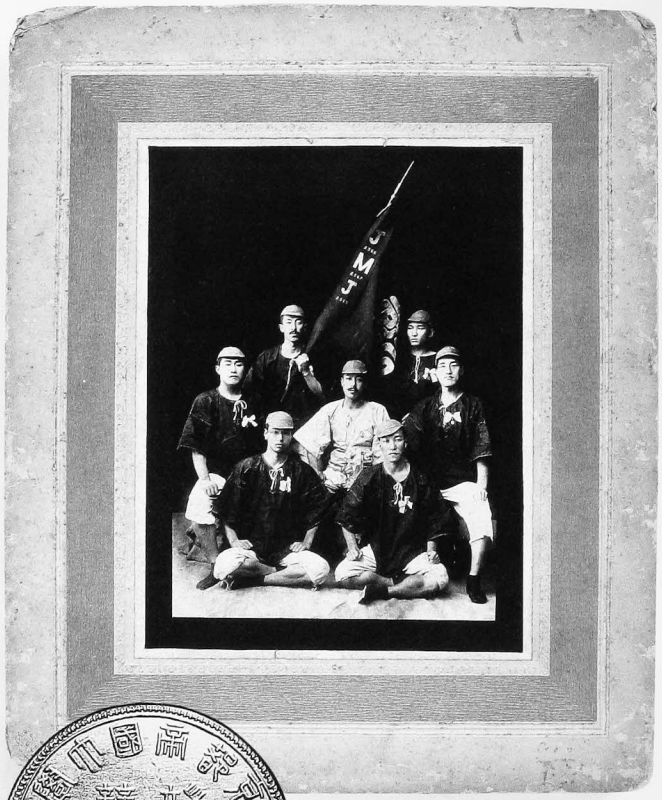
創立期の学生生活

大津三保ケ崎におけるボートの練習風景。(2-60)

1899(明治32)年4月に、第1回陸上運動大会が開催された。主催は、「会員ノ身体ヲ壮健ニシ其心身ヲ修養スル」ことを目的に設立された京都帝国大学運動会(会長は総長、会員は学生・卒業生・職員など)であった。

その後、陸上運動大会は秋に開催されるようになり、かわって4月には1906年より水上運動大会(競漕)が大津三保ケ崎で開催されるようになった。木下総長は、競技におけるフェアプレーの実践を強く学生に求め、他の学校生徒の模範となるべきことを説いていた。実際、運動大会には第三高等学校をはじめ、他校の生徒も招かれて競技を行った。両大会とも分科大学の対抗戦が中心であり、各分科とも勝利を目指してしのぎを削ったのである(ただし両大会とも1910年に中断される)。

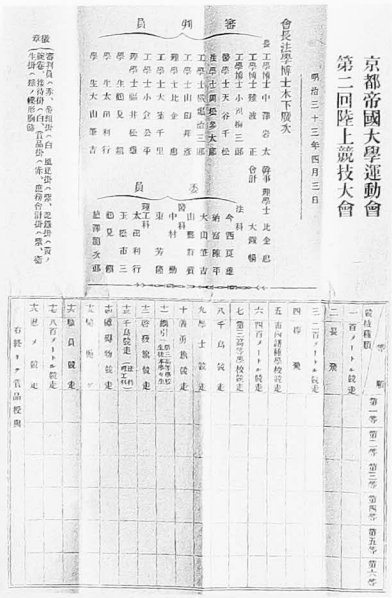
創立期の京大における寄宿舎は、第三高等学校の建物を引き継いだもので、現在の本部構内の北西寄りにあった。開設当初大学側は寄宿舎の運営に関しては不干渉主義をとっていたが、風紀の乱れにしびれを切らし、1906年に一時閉舎した。再開後は新たに舎生自らが総代を選出して諸規則を定め、また舎誌を編纂するなど「自治」制度が導入された。なお、この寄宿舎は、1913(大正2)年に第三高等学校の南側に新築移転するが、これが現在の吉田寮である。



1908年の第3回水上運動大会で優勝した法科大学のメンバー。(2-61)

1908年の第3回水上運動大会の優勝メダル。(2-62)

第1回陸上運動大会(1899年)の様子。後方に写っている図書館の位置から考えて、本部構内のほぼ中央、現在の時計台の北側あたりで催されたと推測される。なお、翌年の第2回以降は新造された本部構内北東隅の運動場で開催されるようになった。(2-63)



京都帝國大學運動會
第二回陸上競技大會

明治三十三年四月三日

會長法學博士木下廣次

役員

審判員

法科 大藏幡
醫科 大田原平
工科 山田三郎

理科 中村芳勝
工科 大澤
醫科 大山整

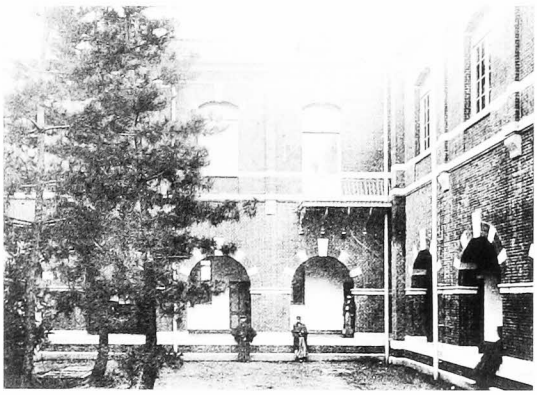
役員

寄宿舎全景。多い時で90人程度の学生が起居を共にした。(2-65)

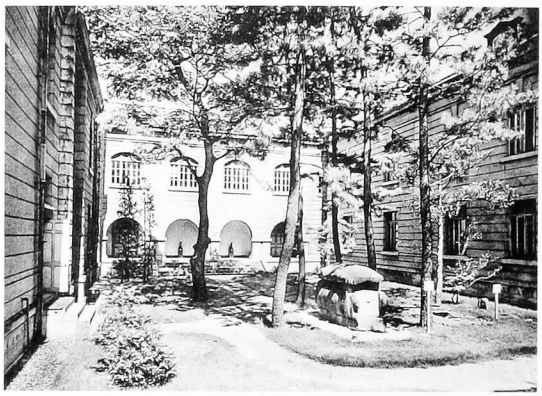
第2回陸上運動大会の役員および競技一覧。最後の「慰メ競走」とは、各競技で入賞できなかった者を集めて競走させたものらしい。(2-64)

京大における中庭

創立期から1970年代くらいまでの京大キャンパスには、中庭をもつ建物が多かった。(たとえば34頁の配置図を見るとロの字型やコの字型の建物が目立つ)。これらの中庭は整備され、木立や小噴水が置かれていたものもあり、学生たちの憩いの場となったり、教室や学会の懇親会なども催されていた。中庭は空間の使い方としては非効率的であり、現在ではその数も少なくなっている(写真で紹介した中庭もすべて現存していない)。しかし、大学においてこのような「遊び」のスペースがもつ意味も軽視できないのではなかろうか。



採鉱冶金学教室の中庭。1912年に増築されてロの字型の建物になった。(2-66)



文学部陳列館の中庭。中央には石棺が置かれている。(2-67)

文学部本館中庭における懇親会の様子(1957年)。(2-68)

法学部経済学部研究室(通称赤レンガ)の中庭。(2-69)